

## 御製に示された遊びの伝統

岡野弘彦

日露戦争のさなかの明治三十七年夏、明治天皇は「夏山水」という題で次の一首をお詠みになった。

年年におもひやれども山水を

汲みて遊ばむ夏なかりけり

（毎年、夏になると、すがすがしい山水を手を汲みとって、心をゆたかに鎮める遊びをしたいと思うのだが、国事を司ることが多忙で、そうした暇すら持てる夏としては無いことだ。）

この御製の持つ深いなげきは、日本の宮廷に古代から伝承せられてきた「魂のあそび」のこころと深くひびき合う思いなのだと感じたのは、古代学のすぐれた研究者で、またその心を伝統的な短歌に表現する歌人の折口信夫（釋道空）であった。彼の第二歌集『春のことぶれ』

には、明治天皇のこの御製を引いた上で、次の歌が記されている。昭和三年のことである。

大君は

あそばずありき

髪髷に

夏山河を見つ、

なげ、り

（大君は、天皇として大切な魂のあそびをすらかなされないで過された。ただ胸の中に、幻影として夏の山河の清い姿を思い思いして、歎息をくり返しておすごしになっていたことだ。）

昭和三年は昭和天皇が京都の紫宸殿で十一月十日、即位礼を挙行された年であり、折口はこの年、「大嘗祭の

風俗歌「大嘗祭の本義」「大嘗祭の本義並びに風俗歌と真床襲衾ますま」「御即位と大嘗祭と」などの論文を引きつづいて執筆し、発表している。

日本では明治以来の近代化、合理化がいよいよすすみ、皇室のあり方も明治十年あたりを境として急速に変化した結果が、即位式や大嘗祭のあり方にまでもおよび、更に天皇の御日常の中で、このようになげきの心を歌われるまでになったのだという思いが、折口には深かったのであらう。

折口は明治二十年の生まれである。幼年期に日清戦争を、青年期にかかった時期に日露戦争を体験している。明治十年頃を境として天皇が心ならずも軍装をした生活に改めていかれたのちのお心のありようについても、我々には思いとどかぬ省察の心が深くとどいていたはずである。

ここで「あそぶ」「あそび」という言葉にこめられた、古来の内容について考えてみたい。

- (1) ここに天照らす大御神あまみ怪しとおもほして、天の石屋戸を細めに開きて内より告りたまはく、「吾が隠りますに因りて、天の原おのづから聞く、葦原の中つ国も皆聞けむと思ふを、何とかも天の宇受売うずめは樂あそびし、また八百万の神諸ももろむら咲ふ」とのりたまひき。こ

ここに天の宇受売まを白しろく「汝命にまさりて貴き神いますが故に、喜び咲ひ樂ぶ」と白しき。

- (2) かれ天若日子あめわかひこが妻下照比売したてるひめの哭く声、風のむた響きて天に到りき。ここに天なる天若日子が父天津国玉の神、またその妻子ども聞きて、降り来て哭き悲しみて、其処に喪屋を作りて、河雁かはかりを岐佐理持きさりもちとし、鷺はさぎを掃持はきもちとし、翠鳥そにを御食人みけとし、雀うすめを確女うすめとし、雉きしなめを哭女なきめとし、かく行ひ定めて、日八日夜八夜を遊びたりき。

- (3) ここに倭にます后たち、また御子たちもろもろ下り到りまして、御陵を作り、即ち其地のなづき田はらほに匍匐はらほひ廻りて、哭きまして歌ひたまひしく、

なづきの田の 稻幹いながらに 稻幹いながらに 匍はらほひ廻もどほろふ  
野老葛のらご

とうたひたまひき。是こゝに八尋白智鳥やひろしに化なりて、天に翔かり濱なみにむきて飛びいでましき。ここにその後たち御子たち、小竹しのの荇かりくひ杖むに、足躰あしむり破れども、その痛みをも忘れて、哭きつつ追ひいでましき。この時、歌ひたまひしく、

浅小竹原 腰なづむ 空は行かず 足よ行くな  
またその海鹽うしほに入りて、なづみ行きましし時に、歌ひたまひしく、

海が行けば 腰なづむ 大河原の 植彥草 海  
處はいさよふ

と歌ひたまひき。また飛びてその磯に居たまひし時、  
歌ひたまひしく、

浜つ千鳥 浜よ行かず 磯伝ふ

と歌ひたまひき。

この四歌は、そのみ葬に歌ひき。故に、今に至るま  
でその歌は、天皇の大御葬に歌ふなり。

(4) 篠の葉に 雪降りつもる 冬の夜に 豊の遊びを  
するがたのしき(神樂歌・本)

瑞垣の 神のみ代より 篠の葉を 手ぶさに取り  
て 遊びけらしも(神樂歌・末)

(1)の例は古事記の天の岩戸の段で、天宇受売が遊びの  
場を演じ、天照大神を岩戸の外へ誘い出そうとする場面  
である。(2)と(3)はそれぞれ天若日子と倭建命の招魂から  
葬送に至る場面で、いずれも遊離した魂を招き寄せよう  
とし、あるいは再び帰ることのなくなった魂を鎮定させ  
ようとする、招魂から送魂に至る魂のための鎮めの歌と  
儀礼である。(4)は神樂歌として歌い、舞われた歌の本末  
の一組である。

こうした例を見てもわかるように、日本における「あ  
そび」の古意は、魂を新鮮にし活力をよみがえらせるた

めに、力ある歌をうたい、舞いをまうことである。当然、  
葬送儀礼より以上に積極的な、天皇の魂が活性化しお体  
に鎮まることを第一の目的としている。

『源氏物語』を見れば、平安時代の宮廷を中心とする  
生活の中で、「遊び」がいかに大切であったことがよく  
わかる。物語の中で帝や光源氏にとって最も大事であり、  
魂が生き生きとしてその活力を豊かに内に貯えられるの  
も、またそれがきらきらしく外に発揮されるのも、「遊  
びをぞせさせたまふ」ときである。それにくらべて、光  
源氏の子の夕霧になると、外来の漢学を習得することが  
専らになり、いわゆる「あそび」から「まねび」学び」  
をよしとする生活に次第に変ってゆく。

折口信夫にとって、天皇が身につけてゆかれる内在  
魂・さらに広い外来魂、すなわち「みたまのふゆ」の問  
題は、研究上の大きなテーマであって、それが折口の研  
究の上で一つの劃期的な展開を示したのが昭和天皇御即  
位式の行なわれた昭和三年であった。一方、天皇の持た  
れる魂の問題は、近代になってヨーロッパの思想・文化  
の急速な摂取、さらに日本の歴史には無かった外国との  
度かさなる戦いと急速な軍事化の中で、未曾有の変化を  
持たざるを得なかった。日本人の中でただお一人、聖な  
る巨き魂を持つていられる故に、人しれず苦しめられた近

代の最初の天皇の苦悩を、これほど身に近く感じて和歌の表現によって示した、古代学者折口信夫の心を思うと、私の心は肅然となるのである。

（なお、御製の「山水を汲みて遊ばむ」と歌われたお心については、「鈴が音の早馬はば駄家まの堤井つづみの水をたまへな妹が直手たてゆ」（万葉集卷十四）や、古い沖繩の組踊り「手水の縁」にあるように、聖なる水は直接に手に汲みとって身にとり入れることを尊んだ、古い習わしが考え合わせられる。）

（元宮内庁御用掛・日本芸術院会員・明治記念総合歌会常任委員）